

幼児教育の
秘密を
公開

特別保存版

2019

ママナ
mama na

<必見!> 6歳未満の子育て中のパパ・ママ応援マガジン

あなたは幼児教育で こんな間違いをしていますか？

ノーベル経済学賞受賞のヘックマン教授によって、気が付かないうちに彼らがあなたに刷り込んだ「英語・水泳・ピアノ・体操」などの習い事中心の「間違った幼児教育」から、あなたとお子さんを「正しい幼児教育」へ導くことができるようになりました。

4歳…5歳…6歳までに、正しい教育を受けるか？受けないか？で、あなたのお子さんの将来は…

賢い子を育てるのに

絶対に…

やってはいけない**5つ**

21ページ

秘密を
丸ごと1冊
大公開！



[教育業界の不都合な真実]

なぜ、子どもの学力は

6歳までに90%決まってしまうのか？ 18ページ

こんな間違いしてない？

幼児教育チェックリスト 10ページ

目次

- 02 なぜ、多くのパパ・ママが間違いをするのか？
- 03 幼児教育の不都合な真実
- 08 脳医学者・東北大学「瀧 靖之」教授インタビュー
- 10 【重要】やってみよう！一流を育てる「珠玉の55か条」チェックシート
- 18 なぜ、子どもの学力は6歳までに90%決まってしまうのか？
- 21 賢い子を育てるのに「絶対にやってはいけない5つのこと」...
- 23 警告!!! これを知る前に習い事を始めてしまうと...



なぜ、多くのパパ・ママが**間違い**をするのか？

多くのパパ・ママはお子さんに「少しでも賢い子に育ててもらいたい」「才能を伸ばす環境を用意したい」と思っているでしょう。そして、多くのパパ・ママが「グローバルの時代だから、英語が話せたほうが良い。0歳から英語を始めよう！」と間違っただけを考えています。

さらに、「健康にも良いし、将来泳げないと恥ずかしいから水泳教室に行かせよう」「ピアノが弾ければ音感が良くなりそうだからピアノ教室に通わせよう」「勉強だけでなく運動もできたほうが良いから体操教室に通わせよう」と間違っただけを考えている人もいます。



たいていのパパ・ママは、お子さんの「賢い子に育てたい」と思いつつ、こんな**間違い**をしている...

たいていのパパ・ママは、お子さんに「少しでも賢い子に育ててもらいたい」「才能を伸ばす環境を用意したい」と思いつつ、**自分の理想に近づけようとして、このような間違いをする**でしょう。中には、自分が今できなくて不便を感じていることを、お子さんには身につけさせようと考えているパパとママもいます。

だから、お子さんにさせたい習い事ランキングは「英語・水泳・ピアノ・体操」が上位を占めるのでしょう。ただこれは、パパ・ママから見たお子さんにとって役立ちそうなもので、将来本当に役立つか結果が曖昧なものばかりです。

多くのパパ・ママが6歳までの幼児教育に関しての正しい知識が不十分であり、その不十分な幼児教育の知識の結果が大きくその後の人生に影響を及ぼしてしまう、その理由は何でしょう

か？「英語は早いにこしたことはない」と考え、「水泳・ピアノ・体操」をやっておけば、英語が話せて、運動ができて、音感が良くて、勉強ができれば将来安泰だと**間違った常識**を持っているのは、なぜでしょうか？これらの問に対する答えは明らかです。

ノーベル経済学者ヘックマンの40年以上にわたる追跡調査の結果、この理由を明らかにしました。ほとんどのパパ・ママがお子さんの幼児教育に関して間違ってしまうのは、あなたのせいではありません。悪いのは、あなたに間違った常識を刷り込んだ彼らです。

幼児教育の**不都合**な真実

どのような常識も情報を繰り返し受けるうちに刷り込まれることによって形成されます。インターネットの教育・育児サイトから情報配信する彼らは、ご存じの通り「専門家とは限りません」。彼らの中には、専門家ではないにも関わらず、あたかも専門家いるように見せて、それらしき情報を配信している人もいます。

中には、科学的根拠なしに、間違った持論を配信している人もいます。インターネットならまだしも、テレビで教育評論家として、科学的根拠なしに、間違った持論を話し、世の中に間違った持論を広めてしまっている人もいます。つまり、**私たちは科学的根拠がない幼児教育に関する情報を、知らないうちに刷り込まれてしまっているのです…。**



私たちは科学的根拠がない幼児教育に関する情報を、知らないうちに刷り込まれてしまっている…

しかも、「6歳までに90%の能力が決まってしまう」と言われるほど、脳の発達が早いお子さん

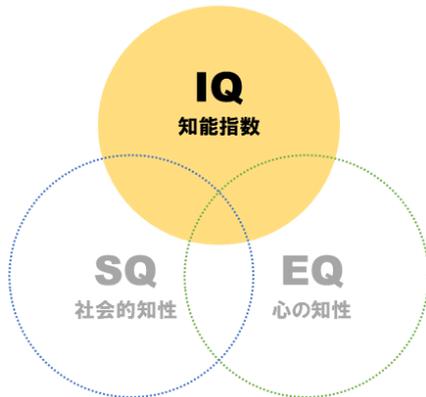
の教育は、遅ければ遅いほど効果が薄くなり、一度間違えたら後戻りできない人生で1回限りの最も重要なことです！しかし、多くのパパ・ママは、専門家とは限らないうえ、正しいか間違っているか分からない情報や、科学的根拠なしの間違った彼らの持論のせいで、正しい幼児教育の情報を受け取れていません。

だから、私たちは彼らの悪影響で、お子さんの教育といえば「英語は早いにこしたことはない」「水泳・ピアノ・体操ができればよい」などと、なんとなく将来役立ちそうなスキルばかりを習得させようとしています。このために、こんな恥ずかしい間違いがずっと続いているのです。

この点が、ノーベル経済賞を受賞した経済学者「ヘックマン教授」が脳科学との融合でたどり着いた、これまで語られることのなかった「幼児教育の不都合な真実」です！ここで説明のために彼の「ペリー就学前プロジェクト」調査をご紹介します。ヘックマンは、就学前の幼児に対して、以下の2つのクラスに分けて40歳まで追跡調査しました。

ノーベル経済学賞を受賞したヘックマン教授による
【ペリー就学前プロジェクト】

<「認知能力(IQ)」重視クラス>



日本の学校教育方針と同じように
「認知能力 (IQ)」を重点的に教育を行った

<「非認知能力(EQ/SQ)」重視クラス>



日本の学校教育方針とは違い
「非認知能力 (EQ/SQ)」を重点的に教育を行った

VS

<各クラスが学ぶ主な能力の違い>

認知能力(IQ)重視クラス	非認知能力(EQ・SQ)重視クラス
いわゆる一般的な学力	やり抜く力
-	やる気・意欲
-	忍耐力・粘り強さ
-	理解度の把握・自分の状況の把握
-	リーダーシップ・社会性
-	立ち直る力・上手く対応する
-	創造する力・工夫する力
-	好奇心・外向性・協調性

※上表のように、日本の学校教育方針は「認知能力 (IQ) の向上」を重視し、非認知能力 (EQ・SQ) を学ぶ機会がないに等しい。つまり、今の学校では非認知能力 (EQ・SQ) を習得することが難しいとも言える。

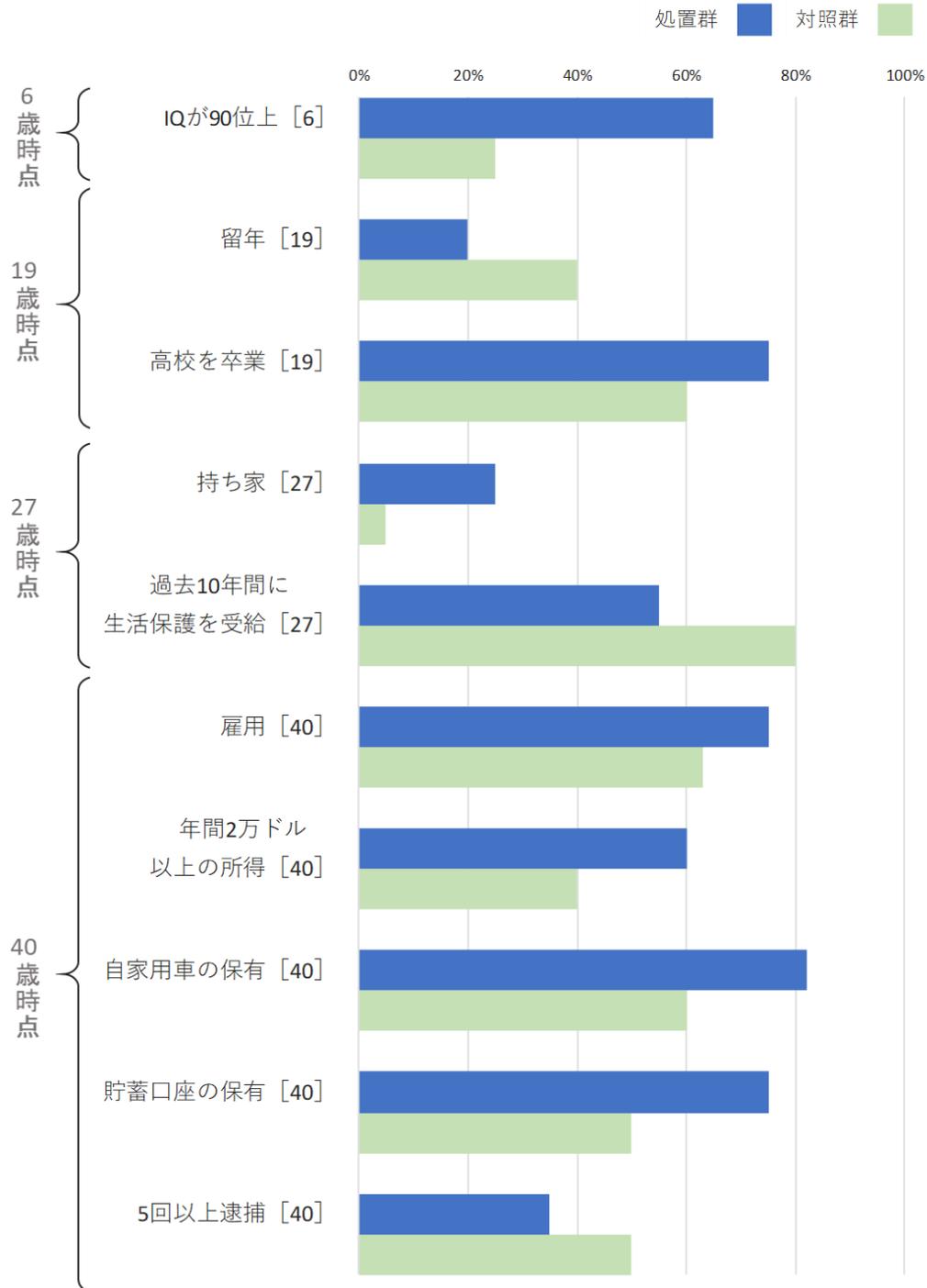
「ペリー就学前プロジェクト」とは:

「ペリー就学前プロジェクト」とは、ノーベル経済学賞を受賞したシカゴ大のヘックマン教授らによる「40年以上も追跡調査」されている教育プロジェクト。1960年代から開始され、現在も調査対象者を追跡調査中。このプロジェクトは、低所得のアフリカ系アメリカ人の3~4歳の子どもたちに「質の高い就学前教育」を提供することを目的に行われた。就学前の幼児に対して、午前中に毎日2時間半ずつ教室での授業を行った。さらに、週に1度、教師が各家庭を訪問して90分間の指導を行った。指導内容は子どもの年齢と能力に応じて調整し『非認知能力を育てることに重点』を置き、「子どもの自発性を大切に」活動を中心にした。

また、教師は子どもが「自分で考えた遊び」を実践し、毎日復習するように促した。復習は集団で行い「社会的なスキル」を教えた。この就学前教育は30週間続けられた。そして、この就学前教育の終了後、これを受けた子どもと受けなかった対照グループの子どもを40歳まで追跡調査し、現在も追跡が続いている。

一方のクラスは、日本の学校教育方針と同じように「認知能力 (IQ)」を重点的に教育していききました。もう一方のクラスは、「認知能力 (IQ)」ではなく、日本の学校教育方針とは違い、『やり抜く力』『やる気・意欲』『忍耐力・粘り強さ』『創造する力』『好奇心』『協調性』などの「非認知能力 (EQ・SQ)」に重点的に教育しました。すると、この2つのクラスに、このような大きな違いが出るようになりました。

結果：ペリー就学前プロジェクト



出所：Schweinhart,L.J.,Xiang,Z.,Barnett,W.S.,Belfield, C. R., & Nores, M. (2005) Lifetime effects:the High/Scope Perry Preschool study through age 40. Ypsilanti:High/Scope Press

このように、日本の学校教育方針と同じ「認知能力 (IQ)」重視クラスと、『やり抜く力』『やる気・意欲』『忍耐力・粘り強さ』『創造する力』『好奇心』『協調性』などの「非認知能力 (EQ・SQ)」重視クラスでは、明らかな違いが出ています。

あなたのお子さんの将来に影響しそうな主な違いを見ると、「非認知能力 (EQ・SQ)」を重点的に教育したクラスのほうが、「認知能力 (IQ)」重視のクラスよりも、

「非認知能力 (EQ・SQ)」を重点的に教育したクラスのほうが…

- 6歳時点での「IQ」が約40%高い
- 19歳時点での「高校卒業率」が約20%高い
- 27歳時点での「持ち家率」が約30%高い
- 40歳時点での「所得」が約20%高い
- 40歳時点での「逮捕率」が約30%低い

「非認知能力を重視したクラス」は、認知能力を重視した対照クラスよりも、
小学校入学の時点のIQが高かっただけでなく、その後の人生において、
学歴が高く、雇用や経済的な環境が安定している

このように、明らかな違いが出ています。「非認知能力を重視したクラス」は、認知能力を重視した対照クラスよりも、小学校入学の時点のIQが高かっただけでなく、その後の人生において、学歴が高く、雇用や経済的な環境が安定していて、反社会的な行為に及ぶ確率も低いということです。

これらの結果は決して根拠のない数字ではありません。科学的手法によって比較されました。この結果も驚くべきなのですが、もっとも興味深いのは「子どもが成人後に成功するかは『幼少期の介入の質』に大きく影響される」ということが分かったことです。

つまり、幼少期に「認知能力 (IQ)」や社会性や情動の「非認知能力 (EQ・SQ)」の各方面の能力を幅広く身につけることで、その後の学習をより効率的にし、それによって学習することがよりカンタンになり、継続しやすくなります。

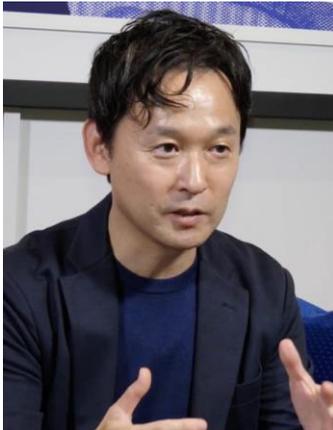
そして、その結果…今の日本の学校教育方針である「認知能力 (IQ) 重視型」の教育よりも、あなたのお子さんに良い将来がもたらされるでしょう・

だから、10万部のベストセラー『16万人の脳画像を見てきた脳医学者が教える「賢い子」に育てる究極のコツ』の著者東北大学の瀧靖之教授も、認知能力 (IQ) だけでなく、この「非認知能力」の重要性について、『0歳から6歳までの子供を持つママのための教育情報サイト「ママナ」』のインタビューでこう述べています。

脳医学者「瀧 靖之」教授インタビュー

学校では教えない**非認知能力**

学校では教えない「非認知能力」



「非認知能力」は重要です。もちろん認知能力 (IQ) 向上のトレーニングは学校でやります。「非認知能力」は、なかなか学校では教えてくれない能力です。非認知能力とは、「やり抜く力、我慢する力、共感する力」などのことを言います。これらは非常に重要です。

特に「共感性」は重要でしょう。やはり、私たちは、仕事でも、スポーツでも、何をやるにしても人と関わることは絶対に避けられません。むしろ、それこそが人たる所以なのでしょう。では、そのときに何が重要かと言えば、それが「共感性」です。

共感性とは、相手が何か困っている、苦しんでいるなど、何かあったときに、自分が相手の立場に立って、相手の気持ちを理解して、そして適切な行動である言葉がけをすることを指します。

このようなことは非常に大切です。私たちは一人で生きていくものではありません。必ずコミュニケーションを取って、助け合いながら生きていきます。だから、この共感性こそが、人生を楽しく豊かにするうえで重要だと考えます。しかし、この共感性は、学校で教えてもらえるものではありません。これが非常に難しいところだと思います。それにも関わらず、共感性は私たち人間にとって大切です。

<瀧 靖之 (たき やすゆき) プロフィール>

東北大学加齢医学研究所教授。医師。医学博士。1970 年生まれ。1 児の父。東北大学加齢医学研究所機能画像医学研究分野教授。東北大学東北メディカル・メガバンク機構教授。脳の MRI 画像を用いたデータベースを作成し、脳の発達、加齢のメカニズムを明らかにする研究者として活躍。

『16 万人の脳画像をみてきた脳医学者が教える「賢い子」に育てる究極のコツ』(文響社) は、10 万部を突破するベストセラー。最新の脳研究をふまえた「科学的な子育て法」を提案。



また、日本における教育経済学の第一人者でもあり、30万部のベストセラー『学力』の経済学』の著者中室准教授も影響を受けている大阪大学の**大竹文雄教授**も、この「非認知能力」の重要性について、解説を担当した『幼児教育の経済学』の中でこう述べています。

大阪大学・大竹文雄教授

就学前教育と非認知能力の重要性

ヘックマン教授の就学前教育の研究は、2つの重要なポイントがある。第一に、就学前教育がその後の人生に大きな影響を与えることを明らかにしたことである。第二に、**就学前教育で重要なのは、IQに代表される認知能力だけでなく、忍耐力、協調性、計画力といった非認知能力も重要だ**ということである。

幼児教育と聞くと、私たちは算数や国語の早期教育をイメージしてしまう傾向がある。しかし、本書で明らかにされているのは、**社会的に成功するためには、非認知能力が十分に形成されていることが重要であり、それが就学前教育で重要な点だ**ということである。



別の研究でもこのことは確認されている。Monffit et al. (2011)の研究では、自制力が高かった子供と低かった子供では、大人になってからの健康度や経済力がどの程度異なるかを30年間の追跡調査で明らかにしている。**自制力が高かった子供は大人になったも健康度が高い**という。子供の頃の自制力は経済的にも相関がある。**自制力が高かった子供を見ると、30年後の社会的地位、所得、財務計画性が高い。**

ジェームズ・J・ヘックマン [著] 大竹文雄 [解説] 『幼児教育の経済学』(東洋経済新報社、2015年) pp109-112より引用

そして、30万部のベストセラー『学力』の経済学』の著者**慶應義塾大学の中室准教授**も、この「非認知能力」の重要性について、著書でこう述べています。

慶應義塾大学・中室准教授

非認知能力を過小評価してはいけない

私がこの章で最も強調したいのは、非認知能力の重要性です。

子を持つご両親の多くは、お子さんの学力テストの結果に一喜一憂しがちです。点数や偏差値ではっきりと数字で表すことができ、その変化も良くわかる学力は当然気になるものでしょう。一方、非認知能力は数値化が難しいだけでなく、どれほど子どもの将来の成功にとって重要なものなのか、今まで十分に示されてきませんでした。この結果、きちんとしつけをすることよりも、テストで100点をとらせることのほうが大事だという価値観が、私たちの社会に根付いてしまっているようにも感じます。



もちろん、学力は重要ではないというつもりは毛頭ありません。しかし、これまでの心理学の貢献によって非認知能力は数値化され、そして経済学の貢献によって、非認知能力への投資は、子どもの成功にとって非常に重要であることが多くの研究で示されています。

中室牧子『「学力」の経済学』（ディスカヴァー・トゥエンティワン、2015年）pp19-20より引用

さらに、この『「学力」の経済学』の著者慶應義塾大学の中室准教授や、同大学の竹中平蔵氏が絶賛し、Amazon カテゴリーベストセラー1位を獲得し、発刊6ヶ月で20万部突破し、各国語に続々翻訳決定している『一流の育て方—ビジネスでもスバ抜けて活躍できる子を育てる』の中でも、非認知能力の重要性が述べられています。以下の表をご覧ください。

やってみよう！

一流を育てる「珠玉の55か条」チェックシート

これは、『一流の育て方—ビジネスでもスバ抜けて活躍できる子を育てる』で紹介している「子どものための55か条」のチェックシートです。そして、この55項目を「認知能力 (IQ)」と「非認知能力 (EQ・SQ)」に筆者が分類したのが、この表です。

<一流を育てる「珠玉の55か条」チェックシート>

認知能力(IQ)			
1	<input type="checkbox"/>	外国語教育は幼少期から慣れさせる	
2	<input type="checkbox"/>	勉強を強制しない	
3	<input type="checkbox"/>	幼少期に「学習習慣」を贈る	
4	<input type="checkbox"/>	勉強の「メリット」を教える	
5	<input type="checkbox"/>	「報酬」を与えて勉強させていい?	
非認知能力(EQ・SQ)			
子ども本人		親の在り方	
1	<input type="checkbox"/>	自由を与え、自分を探させる	1 <input type="checkbox"/> 進路に関して、子供の意思を尊重せよ
2	<input type="checkbox"/>	子どもに目標設定をさせよう	2 <input type="checkbox"/> 自主性は尊重しても、アドバイスは十分に与える
3	<input type="checkbox"/>	「人に迷惑をかけるな」より「役に立て」	3 <input type="checkbox"/> 選択肢を示し、最終選択は子どもに任せよ
4	<input type="checkbox"/>	「小さいこと」から自信をつけさせる	4 <input type="checkbox"/> 過保護に育てない
5	<input type="checkbox"/>	視野を広げ、知的好奇心を刺激する	5 <input type="checkbox"/> 個性を尊重する
6	<input type="checkbox"/>	世界に視野を広げる	6 <input type="checkbox"/> 「自分から興味を持ったこと」を応援する
7	<input type="checkbox"/>	モチベーションの秘訣は「挑戦させる」こと	7 <input type="checkbox"/> 才能の種を見つけて「原石」を磨く
8	<input type="checkbox"/>	途中で簡単にやめさせない	8 <input type="checkbox"/> 子どもの応援団になる
9	<input type="checkbox"/>	「失敗を乗り越える強さ」を身につける	9 <input type="checkbox"/> 子どもに期待を伝える
10	<input type="checkbox"/>	「社交の場」に参加させる	10 <input type="checkbox"/> 「自分から興味を持ったこと」を応援する
11	<input type="checkbox"/>	感謝することの大切さを伝える	11 <input type="checkbox"/> 「本気」を確かめて投資する
12	<input type="checkbox"/>	相手の立場に立って考える癖をつけさせる	12 <input type="checkbox"/> 真剣にならなければ叱る
13	<input type="checkbox"/>	動物を通じて思いやりの心を育む	13 <input type="checkbox"/> 小さいころから「何でも話せる相手」になる
14	<input type="checkbox"/>	楽しく思考力を伸ばす	14 <input type="checkbox"/> 子どもと積極的に議論せよ
15	<input type="checkbox"/>	自制心と他者への配慮をしつける	15 <input type="checkbox"/> 親の「価値観」を押し付けない
16	<input type="checkbox"/>	まっとうな金銭感覚を身につけさせる	16 <input type="checkbox"/> 感情的にならず、理由をしっかりと伝えて叱る
17	<input type="checkbox"/>	教養と感受性を身につけさせる	17 <input type="checkbox"/> 勉強至上主義で育てない
18	<input type="checkbox"/>	「役割分担」でしつけをする	18 <input type="checkbox"/> 親たちの会話が、子どもの人間性をかたちづくる
19	<input type="checkbox"/>	プラス思考で、明るくおおらかに育てる	19 <input type="checkbox"/> 子どもは親の真似をする
20	<input type="checkbox"/>	教育環境で子どもは決まる	20 <input type="checkbox"/> 父母間での「けなし合い」は絶対にダメ
21	<input type="checkbox"/>	勉強での「競争意識」を育む	21 <input type="checkbox"/> 他の子どもと比べない
22	<input type="checkbox"/>	結果重視 vs プロセス重視	22 <input type="checkbox"/> 「正しいほめ方」で伸ばす
23	<input type="checkbox"/>	とりあえず大学に進学させるべきか?	23 <input type="checkbox"/> 子どもの非行には執念で向き合う
24	<input type="checkbox"/>	「書く習慣」を身につけさせる	24 <input type="checkbox"/> 信頼で子どもを包む
25	<input type="checkbox"/>	読書で知見を広め、学習習慣を身につけさせる	25 <input type="checkbox"/> 無償の愛情を注ぐ

ムーギー・キム/ミセス・パンプキン『一流の育て方—ビジネスでもスパ抜けて活躍できる子を育てる』

(ダイヤモンド社、2016年) 付録「珠玉の55か条」チェックシート」に筆者加筆

一目瞭然…このように分類すると分かりますが、一流を育てるのに必要な55の項目は、90%が非認知能力です。「認知能力(IQ)」の要素は、10%に満たない程度で、本当に必要なのは「非認知能力(EQ・SQ)」です。このチェックシートを見ると、一流を育てるには、90%が「非認知能力(EQ・SQ)」が必須であることがよくお分かりいただけるでしょう。

もちろん、非認知能力(EQ・SQ)に分類されたもので「認知能力(IQ)」の要素に見えるものも複数あります。しかし、これらも本文を読むと、結果的には「非認知能力(EQ・SQ)」を養うことが目的です。つまり、純粋に学力でテストの点数を伸ばすために必要な「認知能力(IQ)」が求められるのは、たったこれだけしかないというのが事実なのです。

しかしながら、今の日本の学校教育は、学力でテストの点数を伸ばすために必要な「認知能力(IQ)」に偏り、「非認知能力(EQ・SQ)」を養うことをしていません。ということは…このままあなたのお子さんが成長し、そのまま学校で教育を受けると、この一流を育てるために必要な要素は、ほとんど満たされることがないということです。

言い換えれば、日本の学校教育にあなたのお子さんを任せると
「一流になることはできない」ということでしょう…

あなたが、今お子さんに施している教育は、

このチェックシートに、どれくらいチェックが入るでしょうか…？

もしくは、これからしようとしている教育は、

どれくらいチェックが入るでしょうか…？

ちなみに、「全米最優秀女子高生」を育てた日本人ママであるポーク重子氏は、著書で出版直後から早くも Amazon カテゴリーベストセラー1位を獲得中の『「非認知能力の育て方」心の強い子になる0~10歳の家庭教育』の中で、このように述べています。



一流の育て方

ビジネスでも勉強でも
ズバ抜けて活躍できる子を育てる
ムーギー・キム/ミセス・パンパキン



「全米最優秀女子高生」を育てた日本人ママ・ボーク重子氏

画期的だったヘックマン教授の幼児教育研究



「全米最優秀女子高生」コンクールでも、アイビー・リーグなど全米トップの大学の入学試験でも、審査基準として求められているのは、「正解のない問題に、自分らしく立ち向かって解決していく力」です。それには主体性、柔軟性、想像力、自制心、自己肯定感、自信、回復力、やり抜く力、社会性、協働力や共感力などが求められます。これは従来の「学力」とは違った能力です。

これらを総合して「非認知能力」と呼んでいますが、今やアメリカでもっとも重視されている子どもの能力は「学力」ではなく、人間としての基本的な力、つまりこの「非認知能力」なの

です。

「非認知能力」が注目されるようになったきっかけは、2000年にノーベル経済学賞を受賞した、シカゴ大学のジェームス・ヘックマン教授の幼児教育の研究でした。

(※ヘックマン教授の幼児教育の研究の詳細は本書 4-7 ページをご覧ください)

幼児期には、詰め込み教育で学力を伸ばすより、「非認知能力」の基礎を身につけて、魅力的な人間性の土台を築くほうが重要だということなのです。

「非認知能力」には、人としてのあらゆる良い資質が含まれています。自己肯定感や自制心、社会性、好奇心、想像力、共感性、主体性、柔軟性、回復力、やり抜く力など・こうした力は将来の年収や学歴、職歴などに大きな影響を及ぼし、成功のための重要な要因となります。



【画像】全米最優秀女子高生コンクールで1位
非認知能力高める母の教育論 - ライブドアニュースより引用

ボーク重子『「非認知能力の育て方」心の強い子になる 0~10歳の家庭教育』(小学館、2018年) 97Pより引用

つまり、6歳までの幼児期に身につけるべきなのは「英語・水泳・ピアノ・体操」などの「スキル」ではなく、「認知能力 (IQ)」と「非認知能力 (EQ・SQ)」だということです。だから、「認知能力 (IQ)」や社会性や情動の「非認知能力 (EQ・SQ)」をバランス良く身につけてから、「英語・水泳・ピアノ・体操」を習ったほうが、お子さんにとってより効果的だということです。

しかし・・・あなたは彼らの刷り込みによって、お子さんの能力を最大に伸ばすのに間違った知識を入れられてしまっています。彼らが専門家でなければ・・・科学的根拠もなく・・・ましてや持論を持ち出し、あなたに間違った知識を刷り込もうとしているのが見えてきます。

もし、あなたがそのまま間違った知識を刷り込んだまま

お子さんを教育したら・・・

お子さんの5年後・・・10年後・・・15年後は

一体どのような姿になっているのでしょうか・・・？

だから、この間違った知識を塗り替え「幼児教育に関する正しい知識」を入れ、その正しい知識をもとに教育しているパパ・ママからは、このような声をいただいています。

何も知らず考えずに育てていたらと想像すると恐ろしい・・・



何も知らずに、何も考えずに、何もせずに子どもを育てていただろうから、そう思うと恐ろしい。(と、子どもが小学生になってから特に最近よく思う)

また、親以外に褒める人がいる・・・という環境は日常では少ないので、この教育法が大変大切な存在です。現在小学3年生ですが、3～6歳頃に覚えた「暗記の達人」「論語集」「円周率 200 ケタ」などを、長期間空いても、すぐに思い出して少し練習したら、またすぐにサッとと言えるようになるので、すごいなあと感じます。

(小学3年生のママ)

※画像はイメージです。こちらの声には、個人差があり内容を保証するものではありません。

通っていなかったら他の子と比較して育てていたかも…

通っていなかったら、他の子と比較して、子どもを育ててしまっていたかもしれません。

色々なことに興味を持ったり、プリントをするのが習慣になったり、分からないことがあると、本で調べることをしたり…コペルに通っているからこそ特に本人にとって良い刺激になっているようです。

特に一生懸命やっているわけではなく、本人がやりたがるのでやらせている部分があるので、他の子より出来ることが多く、親の私も比較しないのだと思います。その子その子に必ず良いところがあり、それを伸ばしてあげたい、そう思いながら、これからもコペルでお世話になりたいと思っています。

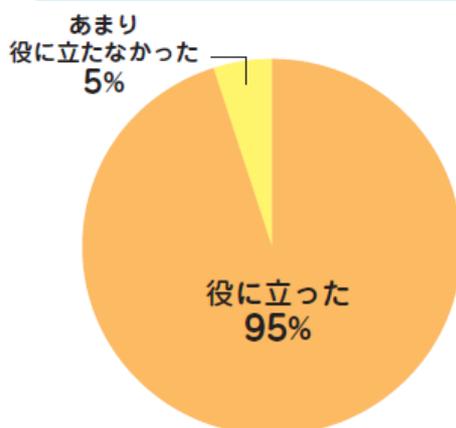
(6歳のママ)



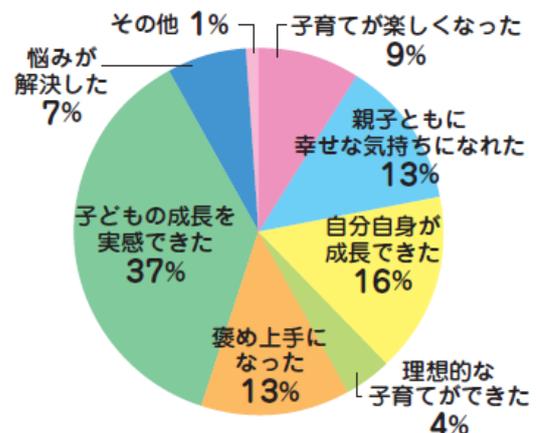
※画像はイメージです。こちらの声には、個人差があり内容を保証するものではありません。

他にも、この正しい知識をもとにした教育法を受けた 1500 名の保護者に聞いたところ、教育だけでなく、保護者として役立ったという声や、子育てでこのような部分が良かったと言っています。

保護者の子育て



子育てで良かった点



もし、あなたのお子さんがこの教育法で育つと、「認知能力 (IQ)」や「非認知能力 (EQ・SQ)」をバランス良く身につけていきます。だから、このようにお子さんの能力だけでなく心を育てるこ

とができます。

このように、彼らによってこの間違っただ知識を入れられてしまったが、その誤った知識を塗り替え「幼児教育に関する正しい知識」を入れ、その正しい知識をもとに教育しているパパ・ママは、お子さんの将来に不安よりも期待が大きくなっています。

だから、「この教育法を知らずに子育てをしてしまったから…」と、お子さんが6歳になったとき青ざめる必要もありません。

そして、この「幼児教育に関する正しい知識」を入れて教育や子育てをし、中学生や高校生、大学生に成長したお子さんを持つパパ・ママからは、このような声をいただいています。

中学・高校で憶力やイメージ力に活かされています

上の子は現在理数科に通っています。そこで、0～6歳まで一緒に通室していたMちゃんと同じクラスになりました。Mちゃんのお母さんとお互いの子どもの**記憶が良いのは教室のおかげ**ネと話しています。

小学生のころ、**宇宙への夢をイメージ通りに書いて、県の作文コンクールで金賞**になりました。現在は、そのかいあって、宇宙航空工学関係の仕事に就きたいと夢を膨らませています。

下の子は小学生からピアノを始めましたが、絶対音感がついています。本人の努力もありますが、**教室で学んだイメージの力を使うので理解も早い**せいか、コンクールで入賞することができました。

(卒業生・高校2年生・中学3年生のママ)



※画像はイメージです。こちらの声には、個人差があり内容を保証するものではありません。

記憶力と集中力に活かされています



学校では、先輩からもかわいがってもらえ、友だちも多く、いつもまわりに人があつまってくるようです。今でも驚かされるのは集中力！何をするにもすごい集中力です。記憶力もとても良いです。

勉強だけでなく、スポーツでも音楽でも、色々な場面でその集中力と記憶力は発揮されています。本もよく読みます。早く読めるので、どんどん進み、本人も楽しいようです。

部活に勉強に忙しい中、英検3級、漢検3級を受け、合格しました。これは、短い時間で集中して勉強できることの結果だと思います。

(卒業生・中学2年生のママ)

※画像はイメージです。こちらの声には、個人差があり内容を保証するものではありません

イメージが得意で、見た物をすぐに再現する力があります

娘は、イメージが得意で、見た物をすぐに再現する力があります。フィギアスケートが趣味ですが、上手な人の演技を見て、すぐに真似することができます。

だから、観察力や洞察力もあると思います。集中力も優れていると言われますが、練習も嫌がらずに好きでやっています。

人と競争するのではなく、自分が向上していきたいという気持ちを持って自律的にやっています。その結果、今年のフィギアスケート2級全九州大会では、最年少で優勝することができました。



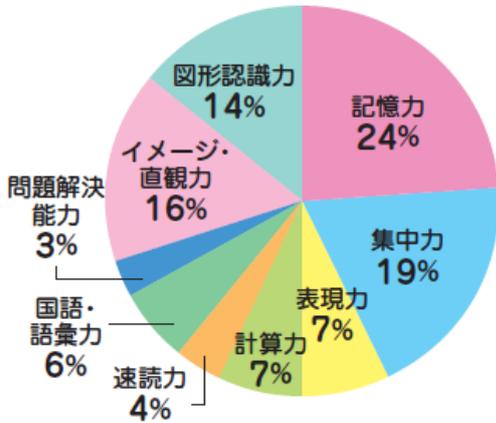
(卒業生のママ・M.D.さん)

※画像はイメージです。こちらの声には、個人差があり内容を保証するものではありません

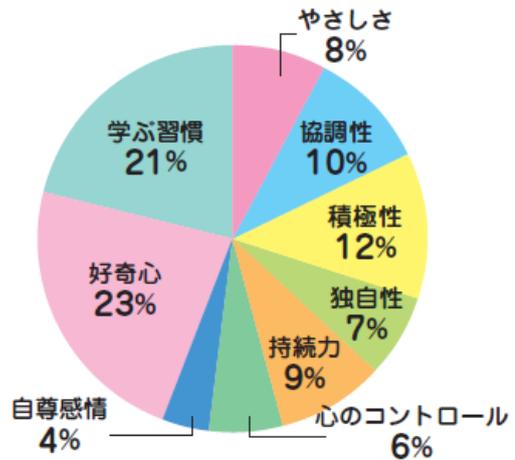
他にも、この正しい知識をもとにした教育法を受けた1500名の保護者に聞いたところ、この教育を通じて「成果を感じた能力」「成果・心の成長」などで、このような実感があると言っています。

す。

成果を感じた能力



成果・心の成長



もし、あなたのお子さんがこの教育法で育つと、「認知能力 (IQ)」や「非認知能力 (EQ・SQ)」をバランス良く身につけながら、お子さんの能力が、まるで周囲からは天才と思われるほどの脳に近づきます。その結果、イメージ力、記憶力、集中力が養われ、中学校、高校、大学でも素晴らしい結果を収めることができるでしょう。

でも、もちろんこうなるには何歳までに学ばなければならないというリミットがあります。では、その幼児教育の方法を受け始める最高のタイミングはいつなのでしょう…？

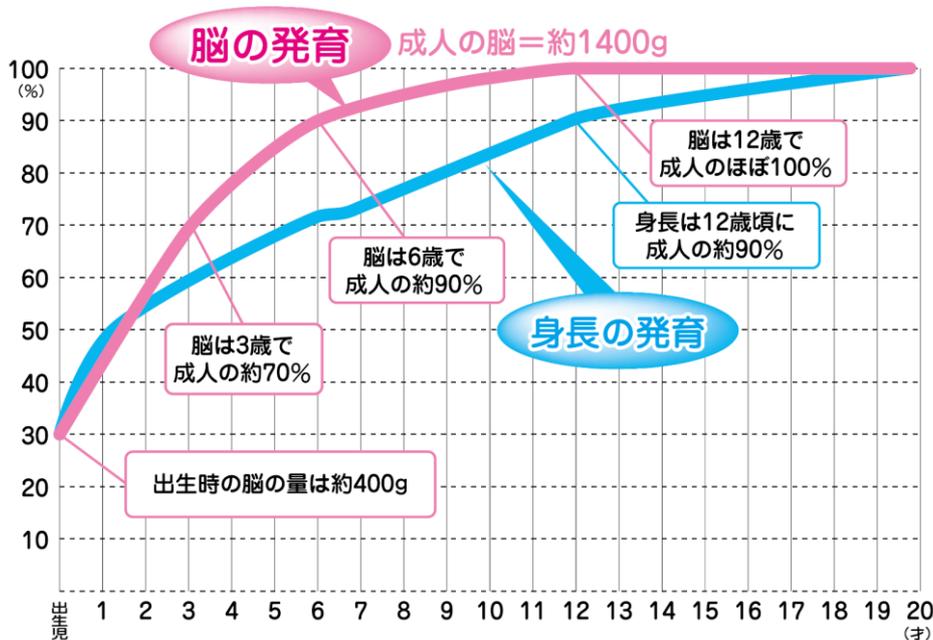
なぜ、子どもの学力は

6歳までに90%決まってしまうのか？

子どもの学力は、6歳までに70%…80%…「90%」決まると言われています。なぜなら…人間の脳の資質は「6歳までに成人の約90%」が完成するからです。つまり、6歳までにお子さんにごどのような教育をするかで、お子さんの学力は90%決まってしまうのです。

だから、もしあなたが「勉強は小学校に入学してからで良いだろう」と、のんびりしていると、あなたのお子さんの学力や能力の向上は手遅れになる可能性が高くなるでしょう。だから、急がなければなりません…

<脳の発達グラフ>



子どもの脳の資質は、3歳で「70%」…6歳で「90%」…12歳で「ほぼ100%」決まってしまう。

つまり、6歳までにどのような教育をするかで将来が大きく変わる…

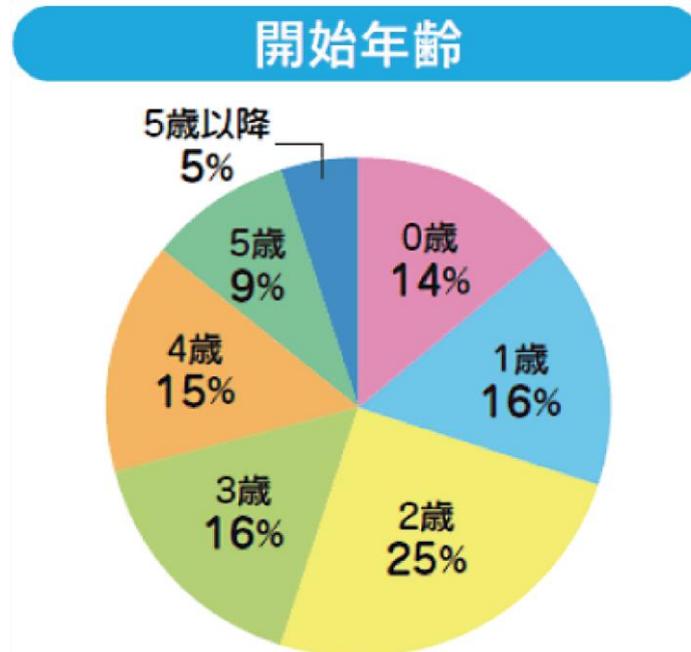
しかも、学力もほぼこの6歳までのタイミングで決まってしまう。しかし、間違った教育を刷り込む彼らは「受験勉強はいつからでも間に合う」と言って、6歳以降でも能力が上がると間違った知識を広めています。ですが、実際は6歳までに何を教育するかで、受験のときには、すでに大きな差が着き、手遅れなのです。

だから、この時期までに、「脳の資質が90%決まってしまう6歳まで」に、「英語・水泳・ピアノ・体操」などの「スキル」ではなく、「認知能力 (IQ)」と「非認知能力 (EQ・SQ)」をバランス良く身につけることが重要。これは、ノーベル経済学賞受賞のヘックマン教授の「ペリー就学前プロジェクト」の調査結果でも科学的に証明されています。

そこで、この「正しい教育法」では、年齢に合わせた効果的な学習をします。しかも、より効果的なのは「脳の資質が90%決まってしまう6歳まで」に適切な学習することです。それよりも後ろになればなるほど、効果は薄れます。つまり、6歳以降に学習塾に通っても、もう勝負は決まってしまうということ。賢明なあなたは、6歳までに何をすべきか、もうお決まりでしょう。

ちなみに、この「正しい教育法」を施す教室には「80%以上」が「3歳以下」から通っています。幼児教育の間違いを正しくした私たちは、「脳の資質が90%決まってしまう6歳まで」に、必要な教育内容や年齢に合わせた学習をお子さんに用意するので、この事実を知らない彼らとは違って、正しい知識でお子さんの将来を導くことができるでしょう。

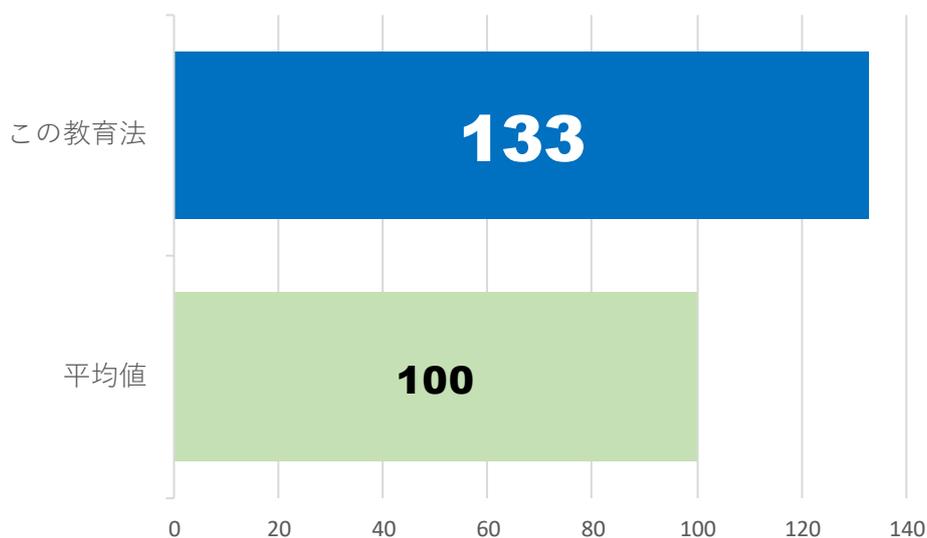
<調査結果：「正しい教育法」を施す幼児教育の教室に通い始める年齢>



この幼児教育の教室には、「80%以上」が「3歳以下」から通い始めている

また、この時期から正しい教育法をもとにした幼児教育を小学校入学前から開始し、1年以上継続したお子さんの平均IQは、平均値よりも「33も高い」という実績があります。

<調査結果：25年以上続く「コペル式教育法」を受けた子どもと平均的な子どものIQの違い>



この教育法を受けた子どもは、平均的な子どもよりも「IQが33高い」。

つまり、この教育を受けた子どもは、平均的な子どもと違い「認知能力 (IQ) や

「非認知能力 (EQ・SQ)」をバランス良く身につけているだけでなくIQも高い

IQが「33高い」ということは、もし平均値のお子さんと、あなたのお子さんが同時に勉強を始

めた場合、その吸収の効率性が全く違うということを意味します。例えば、IQが「33 高い」あなたのお子さんは、70 時間で習得できるが、平均値のお子さんは 100 時間かかるなどの現象が起きるでしょう。30 時間の違いは、想像以上に大きいです。1 日 1 時間をそこに費やすと考えれば、1 ヶ月も差が出てしまいます。この差は、大きいでしょう。賢明なあなたであれば、お子さんにとってどちらが良いかは、もうお分かりでしょう。

だから、ここからも、「脳の資質が 90% 決まってしまう 6 歳まで」に適切な学習をお子さんに用意することが、どれだけ重要か実感いただけるでしょう。それと同時に、この事実を知らない彼らとは違い、この事実を知り正しい知識を持つあなたは、お子さんを正しい将来へ導びくことができるでしょう。

このように、この教育法を 5 歳…4 歳…3 歳までに始めたお子さんは、IQ で平均値よりも「33 も高い」という実績があります。しかも、、、「認知能力 (IQ)」や「非認知能力 (EQ・SQ)」をバランス良く身につけています。さて、あなたのお子さんにとって、この「25 年以上続く「コペル式教育法」を受け始める最高のタイミングは、いつでしょうか…？

賢い子を育てるのに **絶対**にやってはいけない 5 つのこと…

ただし、、、最高のタイミングで、この 25 年以上続く「コペル式教育法」をお子さんに施しても「絶対にやってはいけない」ことがあります。言い換えると、これをやってしまうと、効果が大きく薄れてしまう可能性があるということです。その「絶対にやってはいけない 5 つのこと」とは、こちらです、、、

<絶対にやってはいけない5つのこと…>

絶対にやってはいけない5つのこと	やると良い5つのこと
	
イヤだというのに通わせる	楽しいから自ら行きたいと思う
学習を強要させるようなレッスン	瞳が輝くような楽しいレッスン
1つのことを長時間続けること	「年齢+1分間」で切り替えるレッスン
同じ教材を使い続けること	毎回異なる教材を使うこと
子どもが集中できないは、子どもに集中力がないと考えて、集中を強要すること	子どもが集中できないのは、子どもには集中力がありすぎると考え、子どもが集中できる工夫を凝らすこと

※上表のように、お子さんに「強要」「1つのことを長く続けるレッスン」「同じ教材を使う」

「お子さんのせいにする」ことは、お子さんの瞳が輝かず能力が伸びないので、絶対にやってはいけない。

そこで、私たちは「楽しいから自ら行きたいを思う」「短時間で切り替える内容」「毎回異なる教材を使用」

「楽しいショー」として考えるなど、お子さんの瞳が輝き続けられるように最大限の工夫をしている。

お子さんの「瞳が輝くとき、能力が伸びる」と言われています。反対に言えば「瞳が輝かないとき、能力は伸びない」ということです。だから、賢い子を育てるには、お子さんの瞳が輝かないようなレッスンや、「イヤだというのに通わせる」ことや、「学習を強要させるようなレッスン」は絶対にやってはいけません。だから、私たちは、お子さんの目が輝くように最大限の工夫をしています。

警告!!

これを知る前に習い事を始めてしまうと…

お子さんの能力を伸ばすには、このような教育も重要ですが「英語、水泳、ピアノ、体操などの習い事」も重要ですよ？…残念！違います。これらの習い事をする前に、もっと重要なことがあります。



この「正しい教育法」をもとにした幼児教育は、知性を意味する「認知能力 (IQ)」だけでなく、社会性や情動の「非認知能力 (EQ・SQ)」も育てるので優れた人間性を育みます。例えば、元大リーグ選手の松井秀喜氏は「あまり派手にガッツポーズをしませんね」とインタビューで問われ、「派手なガッツポーズは相手の投手に失礼ですから」と答えました。松井氏にとっては、相手チームの選手でされ、一緒に野球をしている仲間という意識があるのかもしれませんが。

また、最近では大リーグの大谷翔平選手は、二刀流のそのスキルだけでなく「人間性」を高く評価している特集なども頻繁に目にします。他にも、オリンピックを目指す若い選手が、以前のスポーツ選手と違い「コメント力が高い」と評価されるのも、高い人間性の一部と言えるでしょう。

この松井氏などのように、「正しい教育法」ではスキルだけが一流なのではなく、優れた人間性も育みます。反対に、6歳までにこの人間性を育むことをしないで、英語、水泳、ピアノ、体操などのスキルの習得を始めてしまうと、「非認知能力 (EQ・SQ)」が育まれることなく、「認知能力 (IQ)」だけが大きくなってしまいます。

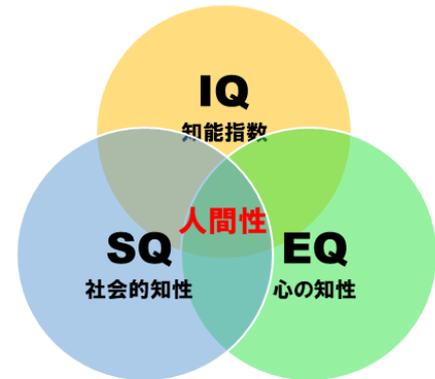
【どちらの脳がいい？】

<バランスの悪い脳>



「あいつ勉強はできるけど、人としては…」
と言われる

<バランスの良い脳>



「あの人は勉強ができて人間性も素晴らしい！」
と言われる

VS

そうなる、「あいつ勉強はできるけど、中身が…」と、よく耳にするようなことが、あなたのお子さんに起こってしまうでしょう。つまり、この幼児教育の方法は、あなたのお子さんを「彼は勉強もできて、人間的にも優れている」と思われる将来につなげるということです。



この教育法は、あなたのお子さんを「彼は勉強もできて、人間的にも優れている」と思われる将来につなげる

ちなみに、この「正しい教育法」をもとにした私たちの幼児教育の教室に通っているお子さんのママからはこのような声をいただいています…

「ありがとう」の気持ちを伝えるために手紙に書いてくれます



通うようになって、母子共に色々な面で助けていただいています。第1子のため、何をどう取り組めば良いか分からずに行きました。ですが、年齢に合わせたプリントを家庭学習に取り入れたことで、学習の習慣が身につきました。

また、男の子ですので強く優しい子に育ててほしいと願っていましたが、お友達には優しく接しています。他にも、「ありがとう」の気持ちを伝えるために手紙に書いてくれます。(主人はこの

手紙を大切にしているようです…)

(6歳のママ)

たくさんの人にやさしく接する姿に驚きます

日々進化する言葉の能力の高さには毎日「すごいなあ！」と思わされますが、それにも増して我が子に感心するのは、あの小ささで他者への思いやりを見せたときです。

家族や友だち、お年寄りの方など、たくさんの人にやさしく接する姿を見ていると、こちらも見習わなければと思わされます。



(2歳のママ)

相手を思いやる気持ちに感動しています



子どもにこちらからお願いしなくても食事の用意や、お手伝いをしてくれます。寝ていると、毛布を持ってきて掛けてくれることや、頭が痛いと言っていると「休んでいいよ」と言ってくれます。自分で考えて、相手を思いやる気持ちに感動しています。

(4歳のママ)

※画像はイメージです。こちらの声には、個人差があり内容を保証するものではありません

このように、「認知能力 (IQ)」だけでなく「非認知能力 (EQ・SQ)」を育んだお子さんは、人を思いやる気持ちなどが養われ優れた人間性を持ち合わせていきます。もし、あなたがお子さんに、「非認知能力 (EQ・SQ)」を養わずに、英語、水泳、ピアノ、体操などの習い事から始めてしまうと、もうこの能力を養うことは手遅れになるでしょう。

しかし、もしあなたが、この正しい教育法の重要性を理解し、「認知能力 (IQ)」だけでなく「非認知能力 (EQ・SQ)」を、お子さんに育むなら、あのような将来が待っているでしょう。賢明なあなたであれば、もうどちらを選択するかはお決まりでしょう。この正しい教育法と間違った教育法のどちらを選択しますか？

これらの正しい教育法を、あなたのお子さんが
6歳になる前に受けることができれば、
どのような未来が待っているのでしょうか？

ただし、、、

誰でもこの教育を受けられるわけではありません…

もし、あなたが「英語だけでできれば良い」「水泳だけでできれば良い」「ピアノだけが弾ければ良い」「体操だけでできれば良い」とお考えであれば、きっとこの「正しい知識をもとにした教育」を受けないほうが良いでしょう。これは、「認知能力 (IQ)」だけを重視するパパ・ママのものではありません。英語・水泳・ピアノ・体操などのスキルだけを重視するパパ・ママのものではありません。

これは、そのようなものをより活かすのに、「認知能力 (IQ)」だけでなく、社会性や情動の「非認知能力 (EQ/SQ)」や人間性もお子さんに育みたいパパ・ママのものです。そして、、、そのようなパパ・ママに、お子さんが瞳を輝かせて、楽しんで学習している姿を見ていただくものです。

ただし、お子さんの成長は「能力が6歳までに90%決まる」ので、このタイミングを逃してはいけません…

ですが、もちろん、あなたは「間違った幼児教育の知識」ではなく正しい幼児教育の知識を持っているので、このような情報が必要ないことは知っています。でも、それこそがあなたにこの

教育をオススメしたい理由です。あなたのお子さんに「こんな将来がまっていたら」どのような気持ちになりますか？

- 4歳くらいではなく「あいうえお」を、2歳になる前に言えるようになっている
- 未就学児なのに、俳句や百人一首などを暗唱して楽しそうに言っている
- 毎日規則正しく早起きしてプリントをやる習慣がついている
- 友だちのすごいところを「すごい！」と素直に褒めている
- 勉強を積極的に楽しんでやっている

でも、間違った幼児教育の知識ではなく…
「正しい幼児教育の知識」を持っているあなたには、
必要ありませんよね？

追伸：

そうそう、一つ言い忘れました・・・

この無料レポートには全42ページの【完全版】があります。

【完全版】2019年版・幼児教育の教科書は、

コチラから【無料】で受け取ることができます。



>> 無料で今すぐ受け取る <<

※【完全版】2019年版・幼児教育の教科書は郵便でお送りします（配送料無料）。また、冊子のため、数に限りがございます。今すぐ無料お届けのお手続きをお願い致します。